

Title	大阪商業講習所の誕生と福澤諭吉：大阪市立大学事始め
Sub Title	
Author	毛利, 敏彦(Mori, Toshihiko)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1985
Jtitle	近代日本研究 Vol.2, (1985.) ,p.207- 236
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	福澤諭吉 特集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19850000-0207

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大阪商業講習所の誕生と福澤諭吉

——大阪府立大学事始め——

はじめに

毛利敏彦

筆者は、大阪府立大学百年史編集委員会のメンバーであるが、本学の誕生と福澤諭吉との関係について若干の知見を得たので、ここに紹介したい。

現在、大阪府立大学には商学部、経済学部、法学部、文学部、理学部、工学部、医学部、生活科学部の八学部、八大学院研究科博士課程に加えて、二つ置研究所、植物園などの附属施設があり、公立大学で最も規模が大きい総合大学である。その歴史を遡ると、一八八〇年（明治一三）一月に発足した私立大阪商業講習所に到達する。したがって、本年（一九八五年）は創立一〇五年にあたる。

商業講習所は、その後、大阪府ついで大阪府に移管され、商業学校、高等商業学校を経て、一九二八年（昭和）三）日本最初の市立大学である旧制大阪商科大学に昇格した。そして、一九四九年（昭和二四）の新制大学への

改組を機会に、大阪市立都島工業専門学校、大阪市立女子専門学校、大阪市立医科大学、大阪市経済研究所と合体して大阪市立大学に発展したのである。

一 明治維新後の大阪と教育

私立大阪商業講習所が開設された一八八〇年（明治一三）頃の大阪は、明治維新が惹き起こした経済変動の打撃から立ち直り、文明開化・殖産興業の気運とともに、日本最大の商工都市への歩みを踏み出していた。

江戸時代の大坂は、「天下の台所」とよばれ、幕藩体制社会を支える全国的な商品流通・金融の中心地として繁栄していた。最大人口は一七六五年（明和二）に四二万人を数え、天下の富が大坂に集まり、豊かな経済力を背景に西鶴や近松に代表される町人文化が花開いていた。また、懷徳堂の漢学や適塾の蘭学など学問の発達も著るしかった。

ところが、倒幕・明治維新は、大坂の繁栄を支えていた諸条件を一気に覆し、大坂経済に大打撃を与えた。貨幣における銀目制度の廃止は商取引を混乱させ、市中に軒を並べた諸藩蔵屋敷の撤退は「天下の台所」の成立根拠を崩し、廃藩による藩債処分は「大名貸し」で栄えた多数の豪商を倒産に追込んだ。一八七二年（明治五）の人口は二六万人に激減したが、大阪の衰退ぶりがいかに深刻だったかを如実に現わしている。

なお、江戸時代には「大坂」と表記されるのが通例であったが、明治新政府発足直後の一八六八年六月二一日（慶応四年五月二日）に大阪府が設置されたことによって、「大阪」が正式の名称となった（伊吹順隆『大坂と大阪の研究——官印と公文書を中心に』一九七九年、参照）。

しかし、大阪経済の立ち直りは早かった。一八七一年（明治四）には、政府によって造幣寮（のちの造幣局）が開設され、外国人技師の指導のもとに、金属貨幣の鑄造のみでなく化学薬品やコークスの製造も行い、また、一八七〇年（明治三）大阪城内に設置された造兵司は大阪砲兵工廠に発展し、いずれも近代日本における金属・機械・化学工業の源流となった。同年創業の堺紡績所は、二〇世紀前半に世界を制覇した大阪繊維産業の出発点であった。一八八二年（明治一五）の工業統計によれば、府県工業種類一〇四種中で大阪府所在は六三種、断然全国一位（ただし当時の大阪府は摂津・河内・和泉のほか大和を含む）であった。工業の勃興は、商業・金融や交通の発達と連動し、一八八〇年代には、大阪が日本資本主義経済化の先頭に位置したのである。

大阪経済の再生・復興と並行して、大阪における近代教育の歩みも始まった。初等教育については省略するが、中等・高等教育について概観すれば、早くも一八六九年（明治二）六月には、舎蜜局の理化学教育が、オランダ人教師ハラタマらによって開始された。同年、府立の洋学校も開設されたが、この二校は合併し、開成所^{セイ}について文部省所管の第四大学区第一中学校、大阪専門学校などを経て旧制第三高等学校となった。また、六九年から府立の仮病院で医学教育が始まり、この流れは迂余曲折を経て現在の大阪大学に連なっている（『大阪大学五十年史・通史』一九八五）。七三年（明治六）には、文部省が大阪師範学校を設置したが、七五年（明治八）に府立の師範学校が開設されたため、官立の方は七八年（明治二）に閉鎖された。七三年、府が欧学校を設置し、間もなく大阪府第一中学校と改称され、七八年には、既設の第一中学校の他に、府下に一〇箇所の中学校が開設されるという盛況であったが、さすがに一校は多すぎて、漸次整理された。この時期の異色の学校として、七九年（明治一二）開校の大阪商船学校がある。これは、船主の光村弥兵衛・住友吉左衛門・渋谷庄三郎らが発起したもので、八一年（明治一四）府に移管され、のちに官立の東京商船学校に合併された（『大阪府教育百年史』第一

一一 「商法学校設ケザル可ラズ」

上述の大阪における産業勃興の気運と教育熱の高まりを背景にして、私立大阪商業講習所の設立が企てられたのである。

その動きが最初に大阪市民の眼に触れたのは、一八七九年（明治一二）八月一四・一五両日の『大坂新報』に記載された長文の社説「商法学校設ケザル可ラズ」であり、筆者は、同新聞編集主幹の加藤政之助という二六歳の青年であった。

加藤は埼玉県の生まれ、慶應義塾出身の新進気鋭のジャーナリストで、大阪財界の指導者五代友厚が経営する『大坂新報』に招かれた直後であった。同紙は『大坂日報』と並ぶ当時の在阪二大新聞のひとつであった。

加藤は、初めて訪れた大阪の模様を、「府中ノ状況ヲ見ルニ、（中略）戸々密接、建築壯麗、溝河四通、屋上ノ楼閣ハ高ク天ニ聳ヘ（中略）実ニ全国商業ノ中心ナリ」と記して、その繁栄ぶりに眼をみはしたが、ここで論調を一転して、「然ルニ其中特ニ怪シム可キノ一事アリ、此商売ノ中心府ニシテ、商法学校ノ設ケナキ是ナリ」と、疑問を提起した。日本最大の商業都市に専門の商業教育機関がないのはまことに不思議だといっているのである。

大阪に限らず、明治前期における商業専門教育のスタートは、他の分野の専門教育よりも相対的に遅れた感があるのは確かである。一八七一年（明治四）、造幣寮御雇外人ブラガによる洋式簿記伝授が日本における近代的商業教育の発端とされるから（国立教育研究所編『日本近代教育百年史九、産業教育(1)』一九七四・宮本又次「大阪にお

る商業・経済教育事始」『大阪大学史紀要』一、一九八二、その意味では、実に大阪において先鞭がつけられたわけである。翌七二年には、慶應義塾・明治学舎・協栄学舎など東京の私塾においても、数学や簿記などの教育が始められた。七三年には、慶應義塾大阪分校が設立され、英学の他に洋算や和算も教えるとしたが、経営不振のため七五年に徳島に移転された（『慶應義塾百年史・上巻』一九五八）。

また、組織的な学校形式のものとしては、慶應義塾大阪分校閉鎖と同年の七五年（明治八）、駐米代理公使森有禮の提唱に基づいて東京京橋に開設された商法講習所が最初であろう。同所が東京商科大学を経て、今日の一橋大学に発展したことはよく知られている（『東京都史紀要八・商法講習所』一九六〇）。七八年（明治一一）には神戸商業講習所と東京の三菱商業学校も開設された（佐野善作編『日本商業教育略史』一九二二）。大阪でも、加藤の論説発表二カ月後の『朝日新聞』（二〇月一九日）には、「府下に有名なる浪花学舎は、東区北浜四丁目へ移転なし、以来商法学課を更設し、夜学を開き簿記等を教授するに、もっぱら実地に適當するを旨とせらるる由（後略）」（『明治ニュース事典』Ⅱ）との記事が出ている。

それはともかく、加藤によれば、いまや文明開化の新日本は先進諸外国と熾烈な商業上の競争をしなければならず、「外国貿易ノ如キハ国家興敗ノ存スル所」であるから、一時といえどもなおざりにすることはできない。したがって、「一日モ早ク商法学校ヲ設ケテ商業ノ術ヲ磨キ、取捨折衷、從來ノ弊ヲ矯メ、帳簿ヲ改正シテ會計ノ道ヲ明カニシ、貿易市場ニ立テ外人ト商利ヲ争ヒ、彼輩奸謀ヲ看破シ、進ンデ海外ニ通商シ、到底日本商人ノ才ト日本ノ富トヲ合シテ彼ニ比スルモ、敢テ耻ヂザルノ地位ニ達セザル可ラス、此時ニ至テ現時日本ノ商人ハ、始メテ内外ノ責ヲ全フセシ者ト云フヲ得可キナリ」と滔々と論じたのである。すなわち、一九世紀の弱肉強食世界において、新興日本が経済面で先進列強と伍していくには、先ず「商法学校」を建て、専門知識を習得した人

材を育成しなければならぬというのが、この社説の要旨であった。これがひとつの機縁となつて、翌八〇年一月の私立大阪商業講習所誕生となる。

この論説に言及して、『大阪商科大学六十年史』（一九四四・以下『六十年史』と略称）は、「帝國商業の最大中心地（中略）に於て、上述の如き商法学校設立の必要が、いはば白面の一青年記者によつて叫ばれたことは、確かに空谷の梵音であり、この叫びを機縁として、わが大学の前身たる大坂商業講習所誕生のことが考えらるるに至つたのは、誠に感銘に値する史実とすべきであろう」（七ページ）と記し、加藤を「大坂商業講習所創立の唱者」（二ページ）と位置づけている。

三 加藤政之助

では、この論説は、いかなる事情もしくは経緯によつて『大坂新報』紙面に登場したのであろうか。大阪に赴任した加藤が、文明開化の陸蒸気（汽車）から梅田「すてんしよ」（大阪訛りなまでステーションのこと）に降り立ったのは「去ル十日、余輩梅田ノ停車場ヲ降りテ徐ロニ市街ヲ徘徊シ、府中ノ状況ヲ見ルニ」云々とあるように、一九七九年（明治二二）八月二〇日であった。そして、その日のうちに「商法学校ノ設ケナキ」ことを察知し、わずか四日後の一四日付紙面に一大論説を発表したのであるから（したがって、原稿は遅くとも一三日までにできていたであろう）、入社早々たいへんな早業だったと言わねばならない。あまりにも鮮やかすぎて、かえつて疑問が生じ、『六十年史』のように手放して「感銘に値する史実」とみなすのに躊躇せざるをえない。

はたして、加藤は、大阪に来てから商法学校設立の必要に気付いたのであろうか。むしろ、入社前からこの意

見を用意していたのではなからうか。そもそも、商法学校設立論は、加藤その人の発想だったのであろうか。他のだれかの主張を取り次いだのではなかったのか。もし、そうであれば、加藤をしてこのような文章を書かせた陰の人物がいたのでなかつたらうか。それは、いったい誰か。これら疑問が解明されない限り、加藤を「講習所創立の主唱者」と単純に決めてかかることには、ためらいを覚えるのである。

ところが、『六十年史』には、「実の所、私立大阪商業講習所設立に関する経緯はこれ以上追及する資料がない。創立当初の書類一切が既に早く失なはれて手の着けやうがない。以上の叙述は本年八十八歳の高齢を以て往時を語り得る加藤政之助翁の記憶を経とし、能ふ限りの史料を涉獵してそれを緯として僅かに織り成した」（二二ページ）と記されているのみである。

この問題解明の糸口をさぐるために、先ず、加藤が大坂新報社に入った経緯から調べることにはしたい。「慶應義塾入社帳」（同塾研究・教育情報センター所蔵）によれば、加藤は一八六〇年（万延元年七月一八日）の生まれで一八七五年（明治八）一月二二日に二二歳で入塾となっているが年齢計算が合わない。一八五四年（安政元）生まれの誤りであろう。在塾中は、協議社という演説討論クラブに所属していたらしい。加藤と同郷（埼玉県）で、私立大阪商業講習所の初代所長となった桐原（旧姓河野）捨三の談話に、「演説家を出さうといふために塾内に協議社といふものが出来ました」（中略）尾崎行雄、波多野承五郎、加藤政之助、松本直巳、古渡資秀、吉良亨などといふ人々が挙げてありました」（石河幹明『福澤諭吉伝』第二巻、一九三二、七二四ページ）とある。ちなみに、吉良亨は、大阪商業講習所第六代所長となった。

卒業後、加藤は、福澤が一八七七年（明治一〇）四月に創刊した『民間雑誌』の記者になっている。やがて、同誌は日刊新聞に発展したが、一年後の翌七八年五月に廃刊になった。その時の編集長が加藤であったが、彼は、

廃刊の事情を次のように語っている。

私の話は、明治六年に出来た慶應義塾出版社より発行した民間雑誌の事であり、(中略) 明治一二年頃には、日々発行の新聞となりました、而して其編輯長は私でありましたが、主として筆を執って居たのは、福澤先生でありました、夫れから明治一年の五月に、大久保内務卿が島田一郎等に暗殺せられた時、先生は此民間雑誌に一篇の論説を掲げられた、其趣意は、世間では大久保内務卿が暗殺せられたと云ふので、非常に驚いて、世の中が闇になったやうに騒いで居るが、大久保と云った所で、日本人の一人である、(中略) 此三千五百萬乃至四千萬中の日々死ぬ所の一人として、死んだのに過ぎない、然るに此人が居なければ、世の中が闇になった如く思ふのは、甚だ不思議であると云ふやうな事であった。處が内務省の警視局(後警視庁)は早速私を呼び付け、今日の論説は、甚だ穏でないから、以後彼のやうな論説を書かぬと云ふ請書を出せとの事でありました、(中略) 引取って来て、先生に話しますと、先生は一言も言はずに、十分か十五分かの間考へて居られたが、頓て口を開いて、夫れならば、此新聞を廃めて仕舞へ、廃刊届を持って直接届けて来るが宜いと云ふことであつた、(中略) 蓋し先生の考は、言論の自由に重きを置き、一時遁れに請書などを出すのは、甚だ卑劣な処置であると思ひ切つて、止められたのであらうと思はれます。(高橋義雄編『福澤先生を語る』一九三四、一四七―九ページ)。

この筆禍事件で『民間雑誌』が廃刊になり、加藤は失職したらしい。その後、約一年間ほど加藤の消息は途絶えるが、翌七九年(明治一二)五月の新聞記事に、次のように彼の名前が現われている。「去る一七日茨城県新治郡土浦町なる水戸同倫社の分社にて、慶應義塾の尾崎行雄、工藤清一、加藤政之助等の諸氏が演説を催されしに、加藤氏の演説中国安妨害の廉ありとて、臨場の警察官より演説を禁ぜられしにより、(後略)」(五年二二日、朝野新聞、『明治ニュース事典』Ⅱ)。つまり、加藤は、折から盛りあがっていた自由民権運動に加わり、茨城あたりで演説活動をしていたようである。この三ヵ月後に、加藤は、『大坂新報』に入社することになる。

四 五代友厚

一八七七年（明治一〇）に創刊された『大坂新報』を、五代友厚が経営するようになったのは一八七九年（明治一二）五月ごろであり、この時、五代の顧問代言人（弁護士）本荘一行が社長に就任した。

五代友厚は、一八三五年（天保六年二月二六日）、薩摩国鹿児島城下で上級藩士の家に生まれた。ペリー来航は、彼の数え年一九歳のときである。やがて、幕府が設けた長崎海軍伝習所に入ってオランダ人教官から自然科学や航海術を学び、開明的開国論者に成長した。一八六二年（文久二）には上海に渡航して、藩の蒸気船購入にあたり、やがて、その船長となって活躍した。翌六三年（文久三）の薩英戦争の際は、僚友松木弘安とともに自発的に英艦の捕虜になった。イギリス文明の実態探索が目的だったといわれるが、当時の武士の心情からは、死にも勝る屈辱を耐え忍ばねばならぬ非常手段であった。戦後、釈放されたふたりは、武蔵国熊谷に潜伏したが、やがて五代は、松木と別れて長崎に移った。残った松木の面倒をみたのが、福澤諭吉である。松木は、後に寺島宗則と改名し、明治前半期外交界の大立者となるが、福澤の生涯の親友であった（『福翁自伝』参照）。この縁で、五代と福澤との間にも、早くから交渉があったわけである。

五代と松木の行動は、幸いにも薩摩藩当局の理解するところとなり、翌六四年（元治元）には帰藩を許された。そこで、五代は、壮大な富国強兵・殖産興業のプランを藩庁に提案したが、その一環として、一八六五年（慶応元）年、松木とともに藩の留学生を引率して、イギリス・フランスに渡航した。五代は、未だ海外渡航を禁じていた幕府の監視を逃れるために、関研蔵と変名している。なお、この時の留学生のなかに、例の商法講習所設立

の提言者となった森有禮（のち初代文部大臣）がいた。したがって、五代は、森とも深い関係があったのである。

一八六八年（慶応四・明治元）、明治新政府が発足すると、五代は、参与職外国事務掛に任命され、神戸事件・堺事件・イギリス公使パークス襲撃事件など外国人殺傷にからんだ外交上の難問題解決に手腕を晒した。ついで、大阪開港の事務を担当することになったが、ここに、五代友厚と大阪との縁が生まれたのである。近代大阪工業の源流となった造幣寮（のち造幣局）の設立にも尽力し、香港からの造幣機械の買入に奔走した。

こうして、かれは、外交や財政分野に頭角を現わし、新進官僚としてエリート・コースを直進していたが、翌一八六九年（明治二）七月、突然辞職した。保守的な在藩士族との摩擦のためであったといわれる。ここに、数え年三五歳の五代は、民間に転じて経済界に志をのばすことになった。

五代は、新天地をゆかりの大阪にもとめ、まず古貨幣を精選・分析して造幣の原材料とする事業に成功した。ついで鉱山業に進出し、半田銀山はじめ多くの鉱山を経営した。その他、藍製造業、製銅業、銀行、商社、商船、私鉄、新聞など多方面の創業に関与し、大阪経済界の重鎮となった。というより、みずから大阪経済界をつくりあげたというべきであろう。

しかし、五代の本領は、個別企業の経営よりも大阪経済界全体の繁栄と協調に尽くしたことであり、「天下の台所」蘇生の大恩人といわれている。かれは、明治維新の経済変動で打ちひしがれた大阪経済に活をいれるべく、八面六臂の活躍をしたが、当時の大阪人は退嬰的で視野がせまく、ともすれば目先の私利に走りがちであった。五代は、そのような人々をまとめていくのに、多大の苦心を払ったのであった。一八七八年（明治二）八月には、有志をさそって大阪商法会議所（のちの商工会議所）を設立し、初代会頭に就任、死去するまでその地位にあった。同年同月には、大阪株式取引所（のちの証券取引所）設立の中心となった。その他、大阪における各種経

濟活動の淵源をたずねれば、五代の息がかかっていないものはないといえるほどで、その果たした役割は極めて大きく、影響は広範囲に及んでいる。

近代の草創期に、五代のような有能で実行力に富むリーダーに恵まれたことは、大阪にとって、たいへんな幸運だったといえよう。大阪経済史研究の大家、宮本又次・阪大名誉教授は、「国事には殉じても私欲を軽く見るというのが、五代の体質のようである。だからあたかも官営事業をやるようなつもりで、損益を度外視して、私的企業に乗り出していった。五代は多くの会社にも関係したが、個人の企業というよりも、大阪の財界人を総動員し、それらを覚醒させ、深い眠りからふるいたたせたいと新規事業を計画し、財界のまとめ役となった。為政者の態度をもっていたわけで、『民』の中に入りこんだ『官』ともいえるだろう」（宮本『五代友厚伝』一九八一、五一九―二〇ページ）と論じている。

五 五代と福澤 その一

さて、一八七九年（明治一二）五月から五代の傘下にはいった『大坂新報』に、同年八月、加藤政之助が入社する運びとなるのであるが、その経緯は、左の八月六日付、五代あて藤田茂吉書簡から推測することができる。藤田は、福澤と同じ大分県出身、慶應義塾を卒業し、当時は『郵便報知新聞』の論説記者であった。この頃、実際は福澤執筆の『国会論』が、門下生の藤田・箕浦勝人共著のかたちで出版されたが、これなどは、藤田と福澤との親近関係をしめす一例証といえよう。

（前略）先般已に申上置候通り、加藤政之助事、明七日当地出発仕候に付、不日着の上は、何分の御愛顧を以て、御引立

被下度奉願上候。右政之助事は慶應義塾にて充分の教育を受け、議論もあり、筆も立つ様認め居候人柄にて、右人物を送り申候儀に就ては、福澤氏に種々相談の上にて差上候事にて、軽率、取計ひ候儀には無御座、同人は、従前、民間雑誌の記者たりし故、新聞社の情態も預知致居候。併し、同人の短所は、少しく軽躁なるの弊にて、此義は、閣下御着意被下、御心添被下候はゞ、不都合も有之間敷、同人入社の上は、慶應義塾同社中一同、尽力可致意気込に御座候。且報知社も、最も親密の関係を保ち、爾来、相推挽する工夫に可致候。(後略)〔五代友厚伝記資料〕第一卷、五五二ページ

藤田は、「福澤氏に種々相談の上」で加藤を推せんしたと記したが、それだけでは不安が残ったのか、福澤自身、左のような丁寧な紹介状を五代あてに認め、加藤本人に持参させた。

爾来、久々不得拝眉、時下酷暑の節候も、御清適奉拝賀候。陳ば、此度、藤田茂吉の紹介を以て、弊塾生加藤政之助義、其御地へ罷出、新聞記者に任ずるよし。政之助事、文筆は相応に出来候得共、何分にも年少、世事に慣れず、独歩の記者として如何可有候や、掛念不少。併、幸にして、右新聞社の後ろに老台の在る有り。何卒、万事御注意被成遣、大なる過ぎなき様、事々物々、御指揮奉願候。い才(委細)は、茂吉より申上候事とは存候得共、尚、掛念に余り小生よりも、特に一書を呈し候。右要用御依頼迄、早々如此御座候。頓首

八月八日

福澤諭吉

五代先生

梧下

〔五代友厚伝記資料〕第一卷、五四九ページ

藤田の書簡に、福澤と十分に相談したうえで加藤を「差上候」とあるから、先ず五代の方から福澤側に然るべき人物を推せんして欲しいと持ちかけたのであろう。福澤が「久々不得拝眉」と記しているように、近年は東京と大阪に別れて久しく会っていないが、前述のように、両者は旧知の間柄であった。したがって、新聞事業に進出することになった五代が、福澤に自社編集陣の強化を相談したのは、自然な成り行きだったように思われる。

この五代からの申し出は、福澤側にとって渡りに舟だったに違いない。なによりも、大阪における五代の勢力から考えて、慶應義塾の影響力を大阪に拡げる絶好の機会であった。当時の大阪が、日本最大の商工業都市であっただけでなく、福澤は、大阪の地に特別の愛着を抱いていたはずである。大阪は、他ならぬ福澤の出生地（大坂玉江橋北詰の中津藩祇屋敷）であった。また、青春時代の情熱を傾けた緒方洪庵の適塾での修業は、『福翁自伝』のなかでも最も感銘深い一駒である。さらに、実際の合理的な大阪の土地柄は、実学尊重の福澤の学風とも適合するものがあつたであろう。そこで、前述の通り、一八七三年（明治六）に慶應義塾の大阪分校を設けたが、時期尚早で挫折せざるを得なかつた。福澤にとっては残念な結果であつたに違ひなく、心ひそかに再起を期していたであろう。

このような背景を考えれば、福澤側が加藤の大坂新報入社を大いに喜び、かつ重要視したであろうことが十分に推測できる。現に、藤田は、加藤の入社が実現したからには、「慶應義塾同社中一同、尽力可致」、「報知社も、最も親密の関係を保ち」との最大限の表現で、慶應義塾や『郵便報知新聞』を挙げて五代や『大坂新報』に協力すると約束したのである。同月二十八日、福澤は故郷中津の友人奥平每次郎に近況を知らせる手紙を送つたが、そこにも、「加藤政之助は大坂新報の記者に雇はれたり」（『福澤諭吉全集』第一七巻、三三五ページ）と記されていた。福澤側は、五代や『大坂新報』との提携を極めて重要視しただけに、その要となる加藤政之助の記者としての力量には大鼓判を押したものの、かれの性格には一抹の不安を抱かざるを得なかつた。藤田は、加藤には「少しく軽躁なる弊」があるから「御心添被下」と五代に頼みこみ、福澤も、加藤が「何分にも年少、世事に慣れ」ていないから「掛念不少」「掛念に余り」と、二度も掛念（懸念）の意を表明して、「何卒、万事御注意被成遣」と、懇ろに五代の「御指揮」を求めたのである。

六 二一つの論説

とにかく、上記のような経緯で、加藤は、晴れて『大坂新報』の記者になった。そして、早速、例の「商法学校設ケザル可ラズ」の大論説を発表する段取りとなるのであるが、よく調べてみると、この文章は、加藤のオリジナルではなかったのである。

一八七五年（明治八）、森有禮の主唱に基づいて東京に商法講習所（後の一橋大学）が開設されたことは前述したが、講習所設立に尽力した森、富田鐵之助の兩名から、あらかじめ商業教育機関設置の必要を世間に訴える文章執筆を依頼されていた福澤諭吉は、前七四年（明治七）一月、「商学校を建るの主意」と題した趣意書を公にした。福澤と森とは、「明六社」同人として懇親の間柄であった。七五年に、森と広瀬ツネとの間に日本最初の婚姻契約が結ばれた際に、福澤が証人となったのは有名な話である。また、森の上司である外務卿寺島宗則は、前述の通り、薩摩藩以来の五代の旧僚、かつ福澤の親友であった。

この文書は、『福澤諭吉全集』第二〇巻、一二三ページ以下に収録されているが、四年半後に書かれた加藤政之助の「商法学校設ケザル可ラズ」と比べてみると、文体こそ違うが、内容においては、論旨、議論の運び方、例示の仕方にといたるまで、瓜二つといえるほど酷似している。以下、両論を比較してみよう。まず、福澤の文章の冒頭を引用する。

人間の事務は内外公私の別あるより、其有様を比較せざれば軽重を断ず可からず。昔鎖国の世に在ては、商人たる者、よく国内の商法を取扱ひ、よく国内の景氣を察して、其機を失することあらざれば、乃ち大に家を興して一大商賈の名譽

を全ふし、一身の生計も立ち世間の便利をも達して、内外公私の分を尽したる者と云ふ可し。此時代には日本の商人、唯国内に於て相互に其身の有様を比較し、此は彼よりも富で、巧なり、彼は此よりも貧にして拙なりとて、其榮辱唯一國の内に止まることなりしかど、……

次に、加藤の文章の該当部分を掲げる。

〔前略〕凡ソ人間ノ事務ニハ内外ノ別アリ、古ヘ鎖國ノ世ニ在テハ〔中略〕商人モ能ク国内ノ景氣ヲ察シ其機ヲ失ハザレバ、乃チ一家ヲ興シ家名ヲ損セズ、一身ノ生計ヲ立ツルヲ得ベシ、是商人ガ當時内外ニ対スルノ責ヲ尽シタル者ト謂フテ可ナン、且夫レ農商モ、畜ニ内國ニ於テ相互ノ地位ヲ比較シ、彼ハ貧賤也此ハ富貴ナリ、彼ハ精巧ナリ此ハ拙劣ナリト謂フニ過ギザレバ、其榮辱モ単ニ内國ニ止リタレドモ、……

後者が、前者を模倣して書かれたのは明白であろう。以下、両論の主要部分を比較してみる。

〔福澤〕今や外国と貿易の取引始まるに及では、事物の景況頓に面目を改め、復た旧時の有様に安んず可らず。彼の富と云ひしものは内の富なり内の巧なり。〔中略〕今日に至ては全日本國の富と諸商人の才力とを一に合し、其全体の強弱大小を以て西洋各國のものに比較せざる可らず。

〔加藤〕今ヤ然ラズ、〔中略〕外国ノ貿易ハ月々ニ増シ、外人ノ来航ハ年々ニ加リ、俄然事物ノ体面ヲ一変シ、復タ昔日ノ有様ニ安ンズ可ラザルニ至レリ、於是乎、昔日ノ豪富ト称セシ者ハ内國ノ富豪ニシテ、前日ノ精巧ト呼ビシ者ハ内國ノ精巧ニ過ギズ、今全国ノ富ト諸商人ノ才トヲ合シテ、其強弱大小ヲ海外ノ各國ニ比スレバ、甚ダ微力ニシテ、其差天地懸隔モ畜ナラザルナリ。

〔福澤〕目今にても、或は諸開港場に於て外国人と商売を取組み、一時に勝利を得て数万の富を致す者あらんと雖も、其実は外国人と戦て勝たるに非ず、他の日本商人が拙劣なるがために意外の僥倖を得たるのみ。外国と戦ひたるに非ず、内國の同士打なり。故に外国を相手に取って商法の鋒を争はんとするには、内外全体の勝敗を一年に平均し又十年に計算して始て双方の巧拙貧富を知る可なり。之を今の商人の公務と云ふ。

〔加藤〕（前略）諸開港場ニ於テ外国人ト商売ヲ取引ヲナシ、或ハ意外ノ利益ヲ占メ一朝巨万ノ富ヲ致セシ者ナキニ非ラザレドモ、直ニ目シテ、日本商人ガ外国ノ商売世界ニ於テ利益ヲ得タリト為スコラズ、独リ利益ヲ得タリト為スコラザルノミニ止ラズ、又日本商人ガ内外ノ責ヲ全フシタル者ト謂フ可ラズ、是レ取リモ直サズ一時一商人ノ僥倖ノミ、其訳何トナレバ、他ニ数百ノ日本商人ガ、外国商売ニ於テ失敗ヲ取アラレバナリ。今若シ開港以來年々歳々ニ商売ノ全体ヲ平均シテ、其間我ニ利スル者多キヲ得バ、始メテ日本商人ハ内外ニ対スルノ責ヲ尽シタリト謂フヲ得可キナリ。

〔福澤〕今の日本の商法を以て外国に敵す可らざるの個条は枚挙に遑あらずと雖ども、爰に其一を示さん。田舎に小店あり、万屋と云ふ。呉服太物の仕入れあり、下駄傘の売物あり、婚礼の諸道具、葬式の品物、悉皆この店に於て調はざるものなし。（中略）其内情を問ふに、品の仕入れは一切都会の問屋を仰ぎ、問屋の命ずる元価を以て元に定め、僅に一分か二割の口銭を取るのみにて、其呉服は何れの地に生ずるもの歟、其下駄傘は何人の手に成るもの歟、誰の手より誰の手に移り、問屋は何の用を為して幾何の利益あるもの歟、問屋の帳合は何様なる歟、其主人番頭は何等の働あるもの歟、是等の事情に就ては夢中の夢にて、之を告る者もなく之を知らんとするの意もなく、唯問屋より授る所の口銭を戴くのみ。

〔加藤〕（前略）現在ノ商売法ニテハ何等ノ差支アルカラ吟味シ、（中略）近ク例ヲ取テ田舎ニ一ノ商賈アリトセン、此商人ノ鞆グ所単ニ一物ニ止ラズ、日用ノ家具農具ヨリ飲食物ニ至ル迄、一切ノ物品ヲ鞆グト雖モ、世間ノ交際狭ク、偶々市場ニ出デ、商況ヲ聞キ、或ハ書面ヲ往復シテ相場高低ノ一端ヲ窺フニ過ギザレバ、毎日其己ガ売買スルノ品物ハ、何ノ土地ニ産スル乎、將タ幾子ノ人工ヲ経テ成リシ乎ヲ知ラズ、且問屋ノ家風手代ノ所為等ヲ弁ヘザルガ故ニ、仕入方常ニ不利ヲ受ケ、正味ノ利潤ハ問屋ノ占ル所ト為リ、僅カニ糟粕ヲ嘗ムルニ過ギズ、

〔福澤〕（前略）今此大都会の大商人なる者、外国人に対しては却て万屋にも恥づ可き所業を為すは何ぞや。（中略）今の日本の商人は外国の品物を買ふに其来る処を知らず、自国の物を売るに其行く処を知らず、横浜神戸に在留する外国人を仰て其取次を頼むに非ずや。（中略）況や今の学問の有様にては外国人と交通も不自由なり、其帳合の法も解し難きもの

多きをや。百方より之を觀て、商売の事に就ては我国に勝利の見込甚だ少なしと云はざるを得ず。田舎の万屋に及ばざること遠し。

〔加藤〕（前略）蓋シ我国商人ガ、現時貿易市場ニ於テ外国人ト商利ヲ争フ者、右ノ場合ニ類スルナキ歟、余ヲ以テ見シトキハ、猶ホ之ヨリ甚シキ者アリ、（中略）我国ノ商人ガ外人ト商売ヲ為スガ如キハ、自ラ英文ヲ解セザレバ文章ノ往復ヲ為スヲ得ズ、（中略）商法ノ学ヲ修メザレバ商売ノ理ニ疎ク、（中略）取引ヲ為ス、必ラズ他人ニ依頼セザルヲ得ズ、（中略）我国ノ貿易ヲナサント欲スル者ハ、独リ五港在留ノ外人ニ依ルアルノミ、（中略）剩ヘ商人ノ内幕ニ入テ其実況ヲ視察スレバ、記簿法熟セズシテ帳簿未ダ全ク整顿セズ、會計未ダ全ク明ナラズ、如此ノ有様ニテ、彼鋭敏熟達ノ外人ト商利ヲ争ハント欲ス、泰山ヲ狭（狭）ンデ北海ヲ超ユルノ類ナリ、

〔福澤〕日本の文明未だ進まずして何事も手後れと為りたる世の中なれば、独り商法の拙なるを咎るの理なし。（中略）唯怠たらずして勉強す可きのみ。維新以来百事皆進歩改正を勉め、（中略）頗る見る可きもの多しと雖ども、今日に至るまで全日本国中に一所の商学校なきは何ぞや。国の一大闕典と云可し。凡そ西洋諸国、商人あれば必ず亦商学校あり。

〔中略〕商売を以て戦ふの世には商法を研究せざれば外国人に敵対す可らず。苟も商人として内外の別を知り全国の商戦に眼を着する者は勉る所なかる可らず。（後略）

〔加藤〕然リト雖モ、我国開港以來年ヲ経ル事僅カ二十数年ニ過ギザレバ、万般ノ事一々咎ム可ラザルハ勿論ナレドモ、外国貿易ノ如キハ国家興敗ノ存スル所ニシテ、（中略）一日モ早ク商法学校ヲ設ケテ商業の術ヲ研キ、（中略）彼ニ比スルモ、敢テ耻ヂザルノ地位ニ達セザル可ラズ、此時ニ至テ現時日本ノ商人ハ、始メテ内外ノ責ヲ全フセシ者ト云フヲ得可キナリ。以上、福澤執筆の「商学校を建るの主意」のほぼ全文と、加藤政之助執筆の「商法学校設ケザル可ラズ」中の対応部分（全文の約三分の二）とを対照しながら紹介した。

両論の趣旨は、開港以来日本経済が国際化した今日、日本商人は、田舎の万屋（よろずや）同然の旧態依然たる有様を脱して、外国商人と対等に営業競争をしなければならない。そこで、商業学校を設けて近代的商業知識

を学ぶことが不可欠であり、対外商戦に勝利することこそ日本商人の使命となる云々、となっている。明治初期新興日本のナショナルリズムの息吹あふれる文章といえよう。

そして、みてきたように、両論は、内容、構成ともに酷似している。したがって、加藤が先行の福澤の文章を手本にし、若干の修飾を加えて自論に仕立てあげたに違いないと推定することは十分に可能である。

七 五代と福澤 その二

しかし、福澤と加藤との密接な関係から判断して、加藤は無断剽窃したのではなく、むしろ、福澤も承知のうえのことであったように思われる。当時の新聞事情からみて、仮に加藤が無断で師の論説の焼き直しを発表すれば、福澤には直ぐに解ったはずである。その場合には、両者の関係が悪化したに違いないが、実際には、その気配はなかった。加藤の社説発表後の両者の関係を示す史料として、一八八〇年（明治一三）一月八日付で、福澤から大阪司薬場勤務の小野清にあてた手紙に、「昨年来加藤政之助其御地に参居候得共、干今御目にも不掛よし。から大坂司薬場勤務の小野清にあてた手紙に、「昨年来加藤政之助其御地に参居候得共、干今御目にも不掛よし。（中略）い才（委細）は加藤氏より御聞取奉願候」（『福澤論吉全集』第一七卷、三六七ページ）とあり、同年月日未詳（九月頃か）の福澤から岡本貞悠あての明治会堂建設関係書簡に、「毎月醸金に付心当の人」として、松山棟庵、中上川彦次郎、矢野文雄、藤田茂吉ら慶應義塾関係有力者と並んで、加藤政之助の名も記されている（同右、四三五ページ）。また、同年十一月発表の慶應義塾維持法案に基づく寄附申込者名簿中に、「金三百円（五カ年賦）加藤政之助」（ちなみに藤田茂吉も同額）と出ている（石河幹明『福澤論吉伝』第二卷、六九九ページ）。これら事例は、加藤の社説が、福澤との間に気不味い関係を生みださなかったことを示唆している。

また、福澤執筆の『国会論』が、門弟の藤田・箕浦二人の名で公にされたことは前述したが、これから類推すれば、福澤一門の間では先生の文章を弟子が「利用」することが皆無でなかったように思われる。

したがって、福澤の承諾ないし黙認のうえで、加藤が酷似の文章を作成したのかも知れないと推定しても、決して空飛んだ想像ではなからう。

それどころか、福澤の方から積極的に加藤に書かせたことも、あり得ないことではない。「商学校」の必要は福澤の持論であったし、時期尚早で失敗した慶應義塾大阪分校の復活は、かれの密かな願望だったはずである。そこで、きっと五代が注目するに違いない加藤のデビュー作に商学校論を選ばせ、しかも、自分の「商学校を建てるの主意」を手本にせよと示唆したのではなからうか。

さらに、加藤の商学校論執筆については、予め五代が了解していた可能性も十分に考えられる。実は、大阪商工会議所図書館所蔵の「五代友厚関係文書」中に、福澤の「商学校を建てるの主意」の現物（パンフレット）が保存されている。このパンフが五代の手元にあった事実は、五代が、福澤の商学校論を知っていたことを示すものである。同パンフは、いかなる経路で五代の許に届いたのであるか。それには、幾つかの可能性が考えられるが、もっとも可能性が大きいのは森有禮からである。前述の通り、五代と森との間には、旧薩摩藩以来の交渉があったから、森が商法講習所の設立を計画したとき、当然、郷党の先輩であり大阪で大実業家となっている五代に賛助を求めたはずである。そこで、同パンフが森の線から五代の手元に渡ったのではなからうか。その場合、五代の念頭に執筆者福澤の存在が印象づけられたであろう。そうであれば、五代が、大坂新報社に福澤門下生を招こうと思いついた動機のかなには、福澤の商学校論を大阪に導入したいとの期待も含まれていたかも知れない。いずれにせよ、五代の手元に福澤の「商学校を建てるの主意」があった事実は、大阪経済界の指導者五代が、加

藤の社説出現以前に、すでに商業教育機関の設立に関心を寄せていたであろうことを示唆している。このように推論すれば、加藤の「商法学校設ケザル可ラズ」は、実質的には五代と福澤との合作だったといえよう。したがって、加藤を「大坂商業講習所創立の主唱者」とみなした『六十年史』の記述は、歴史の表面を浅くなぞったに過ぎず、史料および合理的推論に即して書き改められなければならない。

八 門田三郎兵衛

とにかく、五代と福澤の意をうけた加藤の社説が公表される運びとなったが、ここに重要な人物が登場する。門田三郎兵衛という加藤と同年二六歳の青年実業家であった。かれは、やがて大阪商業講習所設立準備の中軸となる人物である。

門田は、江戸時代からの老舗、十人材木屋のひとつ熊野屋三郎兵衛店（商号は熊三〇くまさんまたは熊三郎）の五代目であった。大坂は、全国木材流通の中心地だったが、一六五四年（承応三）大坂の町奉行所は、材木問屋および仲買中の有力なもの一〇人に命じて竹・木材商売全般の取締りにあたらせた。これが十人材木屋の起りである（堀江誌、一九二九・『西区史』第二卷一九四三・大阪木材業組合編『大阪木材業外史』一九五七）。熊野屋の四代目三郎兵衛は一八六七年（慶応三）に病没、後継ぎがなかったので、分家の熊野屋理平店（熊平）から養子を迎えて五代目とした（伊勢戸佐一郎『長堀浜日記』、『大阪春秋』二五号、一九八〇）。

五代目三郎兵衛は、明治新時代の気風を体現した進取の気象の持ち主で、大阪で最も早く洋服を着用した商人といわれ、家業の材木屋経営のかたわら、一八七七年（明治一〇）には東京の政治評論雑誌『近時評論』に做っ

た『攪眠新誌』を発行した。同誌は、同年六月三〇日に筆禍事件を起こし、第一九号で発行停止処分を受けたので、かれは、週刊の『興民新誌』に切り換えて言論活動を継続した。「所が如何なる事情か、(明治)十一年三月、第三十号発行の時より、『攪眠新誌』発刊以来の発行所たりし高麗橋の進取社より、発行本局を今橋の大坂新報社に移し、誌面の体裁を更め、内容も頗る温和となった。何はさてこの頃より門田氏と大坂新報社とは密接に結びつけらるることとなったと考えられる」(『六十年史』七七八ページ)。その「事情」とは、『興民新誌』に執筆していた山脇^{たかし}巍が、大坂日報に移ったことに関係しているのではなからうか。山脇は、東京の『評論新聞』の筆禍で禁獄に処せられ、その後大阪に来ていたのである(『上野理一伝』一九五九、九三ページ)。過激な議論の山脇が脱したので、『興民新誌』の論調が軟化し、かつ『日報』のライバルである『新報』に接近するようになったのかも知れない。

とにかく、門田は、加藤入社前にすでに大坂新報社とつながりがあったわけである。翌七九年、五代は大坂新報の経営に乗り出すが、もしかしたら五代を引き出すのに、門田が何らかの役割を果たしたのかも知れない。その場合には、門田は、加藤の招致についても相談をうけていたであろう。そうであれば、門田は、福澤の商学校論についても、それなりの関心を持ったであろう。

『六十年史』は、門田は、「加藤氏の所見に最も強い共鳴を覚え」、「年若き両者は相見て忽に肝胆相照の仲となった」と記述しているが、むしろ、加藤来阪前から、門田にはやがて商学校設立に尽力することになる素地があり、五代や福澤の動きにも一定の関係があったのではなからうか。加藤の社説執筆事情やその内容についても、あらかじめ承知していたかも知れない。その後の門田の活動と関連づけて考えると、このように推測する方がより自然である。

さらに、福澤の商学校論に触発された五代は、大阪にも同種の学校設立を計画し、傘下の大坂新報に招いた加藤に例の社説を書かせて（多分、福澤とも連絡をとりながら）世論の啓発・喚起をはかるとともに、若くて実行力のある門田に準備作業を委ねたのではなからうか。『六十年史』は、例の社説を機会に意気投合した加藤と門田がたちまち親友となり、「かような間柄になったことから、商法学校の問題も自然談笑の間に成熟して行ったものらしく」（八ページ）と想像している。しかし、大阪商業講習所の開設は社説発表後わずか一年三ヵ月の翌八〇年一月であるから、いかに門田に実行力があつたとしても、計画が「自然談笑の間に成熟」したものであれば、その後の進行がスムーズ過ぎるように思われる。やはり、加藤の来阪前に、すでに五代のもとで、ある程度のお膳立てが進められていたはずだと推測する方が、事態を無理なく説明できるであらう。もっとも、来阪後の加藤と門田とが急速に親密になつたのは事実のようである。

九 交詢社

こうして、ここに大阪商業講習所創設にかかわりのある四人、五代・福澤・門田・加藤が揃つたわけであるが、この四者のつながりを裏づける史料に、「交詢社員姓名録」第一編（明治一三年三月）がある。これは、同社発足時の会員名簿であるが、そこに五代以下四名が登載されている。

福澤が、「知識交換世務諮詢」を目的とする社交団体、交詢社の設立準備に着手したのは、一八七九年（明治一二）七月から八月にかけてであった。ちょうど、加藤の大坂新報入社が決まったところである。九月二日の第一回創立準備会の出席者三一名中に、加藤を五代に斡旋した藤田茂吉がいた。「交詢社への入社勧誘は、（中略）個

人的な関係を重く見て、各人が知友を多く誘う」（『交詢社百年史』一九八三、四二ページ）やり方だったようだから、五代を勧誘したのは藤田だったのではなからうか。五代が入社したので、門田も続いたのであろう。もっとも、門田は、加藤の線から入社したのかも知れない。

交詢社は、翌八〇年（明治二三）一月二五日、発会式を挙げ、旧熊本藩主一族の長岡護美が会頭（議長のこと）、旧佐賀藩主の鍋島直大が副会頭（副議長）となつて常議員を選出、ついで常議員会で常議員長に福澤、同副長に西周を選んだ。石河幹明著『福澤諭吉伝』第二卷（前掲）には、大隈重信、金子堅太郎、後藤象二郎、由利公正ら発会当時の有力社員八〇名を掲げているが、そこには五代の他、大阪財界の有力者で五代に近い土居通夫、大三輪長兵衛、広瀬宰平の名も挙っている（七七四ページ）。かれらは、五代の縁故で入社したのであろう。関西経済界のドン五代の加入は、交詢社の社会的信用と名声にも寄与するものがあつたに違いない。「五代友厚関係文書」（前掲）には、初期の『交詢雑誌』や姓名録が保存されている。

これら事實は、当時の五代と福澤との友好関係を示しており、加藤の社説が実質的には五代・福澤の合作とみなし得ることを側面から補強する材料といえよう。

十 桐原捨三

上記「交詢社員姓名録」第一編には、もう一人の重要な名前が載っている。「大坂八軒家郵便局 駅通局 河野捨三」すなわち大阪商業講習所初代所長となつた桐原捨三である（かれが河野姓から桐原姓に変わったのは一八八〇年から八一年頃と思われているが、日時ははっきりしない。以下、呼称を「桐原」とする）。

「慶應義塾入社帳」（前掲）では、河野捨蔵となっていて、一八五五年（安政二年一月二日）生まれ、加藤政之助と同郷の武蔵国足立郡出身、加藤より僅か七日前の一八七五年（明治八）一月一日に入塾している（『桐原捨三翁追憶録』一九三〇の年譜では七月三日生れとなっている。しかし、この年譜には不正確な個所がある）。かれは加藤より一歳年少で、両者は在塾中から親交があったようである。

桐原来阪の事情について、『六十年史』は次のように記述している。

やがて（明治）十三年二月には、門田氏の外に、当時大阪の北区長として実業振興に多大の熱意を示していた河口淳氏が加はり、この門田・河口の両氏が商業教育機関仮創立事務委員となっている（中略）。ほど設立費用の目鼻もついたので、加藤氏はその後、上京の機会に、このことを福澤先生に報告した。所がこのとき、先生はその拳を喜ぶと共に、「時に君の同郷の桐原が、今駅通局に勤めているが、あの地位はどうも面白くない。一つは桐原をその商業講習所の所長にしてはどうか、一骨折るやうに」といふ話である。之を聞いて加藤氏も大いに喜び、帰阪後、この事を同志の間に告げ、又桐原氏にも伝えて諒解を得、かくて桐原捨三の初代所長就任は確定した。（中略）桐原氏が来阪して創立事務に関与するに至った月日は遺憾ながら明確でないが、この年八月には大阪の地に来住して居り、その頃以後の「朝日新聞」を閲するに、桐原氏は（中略）旺んに演説会に出演して、市民の覚醒に力を致していた証拠が顕著に残されているのを見る。（中略）大体八月来阪後、門田・河口両氏から事務を引継ぎ、鋭意開所準備を進めつつ、他面政治運動をも並行的に実践していたものと考えられるのである。（九一—一〇ページ）（傍点は引用者）

すなわち、一八八〇年二月以後のある時点に加藤が上京して福澤から桐原の推せんを受け、その結果、桐原を大阪に迎えることになり、八月頃来阪したとしている。しかし、この記述は、諸史料が示す史実と食い違っている。現に、交詢社発足時の同年一月には、桐原はすでに在阪（八軒家郵便局勤務）していたのである。『西区史（大阪）』第三卷（一九四三）には「明治十二年浪華に来たり」（四七六ページ）と出ているが、この方が正確であろう。

また、福澤が桐原を所長候補に推せんした云々にも疑問がある。愛知県の豪農林金兵衛は、桐原を通して福澤と知己になった人だが、八〇年（明治一三）八月一二日付福澤から林あて書簡に、「河野は当時大阪に在て商法講習所設立の事を企居候よし」（『福澤諭吉全集』第一七卷、四〇七ページ）とあり、「……候よし」という筆致からみると、福澤は桐原の大阪行に直接関係していなかったようである。

さらに、八〇年二月ごろに河口淳が仮創立事務委員となったことを示す史料も見当たらない。

そして、何よりも、このあたりの『六十年史』の記述が信用性を欠くと思われるのは、肝心要の五代の動きにほとんど触れていないことである。多分、八八歳加藤翁の我田引水的で不正確な回顧談に引きずられたからであろう。

十一 興亜会

前記「交詢社員姓名録」以上に興味があるのは、「興亜会」の会員名簿である。

興亜会は、日清提携を軸とするアジア連帯をもとめた文化団体だが、創立総会が開かれたのは、一八八〇年（明治一三）三月九日、交詢社発足の一ヵ月半後であった。まず、事故のため欠席した会長長岡護美に代って鍋島直大が祝辞を述べ、副会長渡辺洪基の趣旨説明、幹事草間時福の経過報告につづいて、幹事曾根俊虎が駐日清国公使何如璋の祝意を紹介した（『興亜公報』第一輯一八八〇・黒木彬文「興亜会の成立」、『九州大学政治研究』三〇号、一九八三）。

長岡と鍋島が交詢社発会式の正副議長だったことは前述の通りだが、草間時福は慶應義塾の出身で交詢社の創

設事務を手伝った（『交詢社百年史』六三ページ）。このように、両団体には種々の接点があり、微妙に交錯していた。福澤は入会してはいないようだが、興亜会創立員に中上川彦次郎（交詢社常議員）、同盟員に小幡篤次郎（交詢社幹事）など慶應義塾系の有力者が名を連ねている。実は、興亜会の陰の後援者に勝海舟がいたが（前掲黒木論文、それが、福澤に入会をためらわせた理由のひとつではなからうか。福澤が「瘦我慢の説」を書いて勝の行跡を批判するなど、両者の関係がよくなかったのは周知のことである。

ところで、五代は、興亜会創立員のひとりであった。前掲黒木論文によれば、興亜会の源流のひとつは、大久保利通と何如璋とが企てた振亜会計画であった。ところが、同計画が大久保暗殺（一八七八年五月）でいったん途絶したのを、米沢出身の海軍々人曾根俊虎が復活、発展させたものである。同会と大久保とのつながりは、創立員に利通の遺児大久保利和と牧野伸顕の名が挙げられていることから推測できる。かつ利和は役員にもなっている。同じ薩摩藩出身の五代と大久保とが親密な仲であったことはよく知られているから、五代は、その縁故で興亜会に関係したのではなからうか。

さて、前掲「五代友厚関係文書」には、かなりの興亜会関係史料が含まれている。その中に、以下三種の会員名簿がある。①『興亜会々員録』（作成日時不明、表紙に「大阪興亜第二分会之印」を押捺、総員二二九名のうち興亜第二分会（大阪）は創立員一九名と同盟員二〇名。②『興亜会々員姓名録』（明治一三年七月三〇日調査、興亜本会）総員二七一名うち大阪之部は創立員二〇名と同盟員二二名。③『興亜大阪分会員姓名』（作成日時不明、表紙に「大阪興亜第二分会之印」を押捺、創立員二四名と同盟員二六名。以上を比較検討して会員の所属や会員数の変遷などから考証すると、①②③の順に作成されたものと推定できるから、①は一八八〇年七月三〇日以前の作成、多分発会直後のものであろう。

そこで、第二分会（のち大阪分会）所属の創立員で①②③のいずれにも名前が載っているものを最初の名簿記載順に列記すれば、以下の一六名となる。

府鞆姓北通一丁目	五代友厚
同 西長堀北通り二丁目	門田三郎兵衛
同 鰻谷東ノ町八番地	広瀬宰平
同 曾根崎村於初天神脇	土居通夫
同 土佐堀裏町一丁目	川口淳
同 西長堀南通二丁目一六番地門田商店	河野捨三
同 靱上通二丁目一六番地	加藤政之助
同 中ノ島四丁目三番地	本荘一行
同 江戸堀四丁目矢野方	吉良亨
同 梅田三菱支社	内田耕作
同 北堀江四丁目	田中栄蔵
同 同	大三輪長兵衛
同 高麗橋通り五丁目六番地	小島忠里
同 同 心齋橋角	真島襄一郎
同 京町堀二丁目朝日新聞前	村山龍平
同 池田郡役所	橋本正徳

うち、一〇名は、すでに本稿に登場している。五代、門田、河野（桐原）、加藤については説明の要もあるまい。広瀬、土居、大三輪は交詢社員、本荘は五代の顧問代言人で大坂新報社長、川口は「六十年史」で仮創立事務委員とされた河口淳のこと、吉良は慶應義塾での加藤の友人である。この一六名のほとんどは、五代の線から興亜会に入ったのである。つまり、この名簿は、当時の五代人脈の一部を表わしているといえよう。また、桐原の住所「門田商店」は、門田三郎兵衛の弟で、興亜会第二分会同盟員の筆頭に記載されていた門田平三と同一である。桐原は、門田の実弟宅に寄宿していたようである。あるいは、すでに郵便局を退職していたのかも知れない。

十二 開所

さて、上記名簿と次の史料とを見比べていただきたい。

商業講習所	
発起人	門田三郎兵衛
	内田耕作
	田中栄蔵
保護役	本庄一行
	熊谷辰太郎
仮創立委員	

門田三郎兵衛
加藤政之助
河野捨三

この史料は、「五代友厚関係文書」中にあり、和野紙に毛筆で書かれている。今のところ、大阪商業講習所に
関する最も古い文書と思われ、少なくとも一八八〇年（明治一三）六月以前ものと推定できる。ここに出てくる
人名は、熊谷辰太郎を除いて、すべて興亜第二分会創立員メンバーに含まれている。なお、熊谷のところには会
計役を依頼する旨が書き加えられている。この文書が五代の手に保存されていた事実、そして、大阪商業講習
所の創立仮事務所が「北久太郎町四丁目興亜分会内」に置かれたこと（『六十年史』一〇ページ）などから総合的に
判断すると、講習所計画は、五代を中心とする大阪の興亜会グループの間で醸成、具体化されたことは明白であ
らう。すなわち、福澤の商学校論に触発された五代が、配下に門田、加藤、桐原らを集めて（興亜会グループ）商
業講習所設立を推進したとみなして間違いあるまい。

ついで、同年六月には、活版印刷の「大阪商業講習所設立申合規則」（『五代友厚関係文書』にあり）が作成され
たが、そこに記された仮創立事務委員には、門田・加藤・河野（桐原）に大三輪長兵衛の名が加わった。翌七月、
河野捨三の署名で活版印刷の「大阪商業講習所設立之主意及規則課目」が公にされた（『五代友厚関係文書』にあり）。
そこには、「苟クモ社会ノ義務ヲ知ルノ諸君ハ不屈ノ気力ヲ励マシ、工業ヲ起シ商売ヲ盛ニシ、外ハ赤髯ノ黠奴
ヲ庄シ、内ハ財用ノ痼疾ヲ治シ、以テ富国ノ基ヲ建テサル可ラス、而シテ之ヲ為スノ道先ツ各人の智見ト経験ト
ヲ得ルニ在リ（中略）、其智識ヲ練リ経験ヲ積ニハ先ツ第一ニ之ヲ講スルノ場所ナカル可ラス、是レ則チ当府下

ニ商業講習所ヲ設クルノ急務タル理由」と設立趣旨が述べられていた。

ここに、講習所開設事務は軌道に乗り、生徒募集も順調にすすんで、いよいよ一八八〇年（明治一三）一月、私立大阪商業講習所は西区立売堀北通三丁目十七番地において晴れの開所を行ったのであった。

開業直後、一二月八日の『朝日新聞』には、つぎの記事が載せられている。

「府下立売堀に在る商法講習所は近頃追々盛大の域に進み、夜学生の如きは既に百余名にも及びし由、夫に付同所にては甚狭隘にて万々不都合の筋もあれば、不日の中旧阿波座分署の跡へ引移らるるやに聞」。

〔付記〕 本稿は、現在執筆中の『大阪市立大学百年史』の関係個所に若干の加筆を行ったものである。福澤研究センターの丸山信氏、佐志伝氏から種々有益な御教示をいただいたことに謝意を表す。